秋田県立博物館研究報告第34号　49～54ページ　2009年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.34, 49-54, March 2009

武士学者・根本通明

佐々木　人　美*

１．はじめに

根本通明は易学で知られる漢学者である。文政５年（1822）、出羽国刈羽野村（現大仙市刈和野）に生まれた。藩校・明徳館で学び、のち教授する側となり、明徳館学長までつとめる。

武士としても、戊辰戦争において総軍陣場奉行として軍功第一等賞となる。

のち上京し、その卓越した学問の力で、漢学者としての地位を確立していく。

明治19年（1886）には、明治天皇御講書始にて御進講という名誉ある役目を果たす。斯文学会教授、帝国大学文科大学講師、東京学士会院会員、東京帝国大学教授となり、明治32年（1899）には、秋田県で初めて博士号を授与されている。

この文章では、「武士学者」と呼ぶにふさわしい通明の生涯を紹介したい。

根本通明晩年の肖像（個人蔵）

２．通明の生涯

根本通明は文政５年（1822）刈和野村（現大仙市刈和野）に生まれた。父は地方在住の藩士、根本九郎右衛門通久であり、母は六郷村の漢学者熊谷氏から嫁いできた幾子である。学問好きの母は、子守歌代わりに『論語』や『孟子』を読み聞かせたため、通明は４歳でそれらを暗唱していたという。

６歳で郷校・崇文館に入る。10歳の時、藩校・明徳館の勤学生であった宇野某と『孟子』について論争となり、ついには論破したといわれている。勤学生というのは、成績優秀な奨学生のことであるから、この一件で藩内に通明の才能が評判となる。そして、11歳で明徳館から出仕試験免除の通知を受ける。入学試験を免除されたのである。明徳館の入学資格は16歳以上であることであるから、これはまさに異例の待遇であった。通明は、角館の家塾・朋来堂を経て14歳で藩校・明徳館に入校する。藩校・明徳館は、組織が充実していた。総裁はいつもいるわけではない名誉職であり、祭酒・文学・助教の三役を学長と呼ぶ。教授と教授並がそれぞれ６名いる。学ぶ内容は漢学、ことに武士の社会の基盤をなす儒学である。

通明は明徳館に14歳で入学、15歳で勤学生となる。その猛勉強ぶりは伝説となっている。通明の持っていた漢字の辞書は『玉篇』十二巻である。通明はこの辞書を引く時間がもったいないと丸暗記したという。その他にも、猛勉強で机に彼の肘で凹みができた。蚊に刺されば居眠りできないので、蚊帳を用いずわざと刺された。日が傾いていくその明かりを追って机を移動し二階から落ちた。居眠りを防ぐため、こっくりすると額に刺さるように小刀を机に立てたなどといわれている。

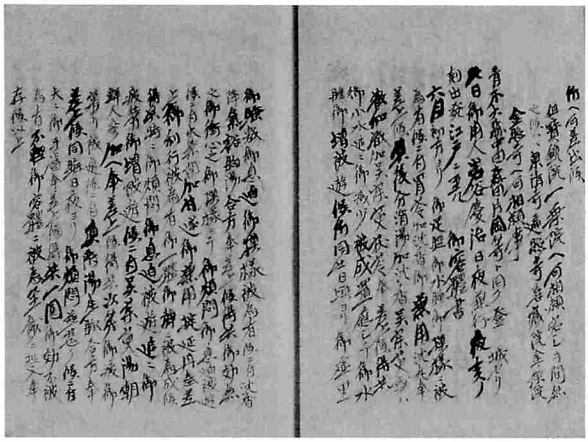
明徳館ではその後、指導する側にまわり、明徳館教授助手を経て明徳館教授となる。また、久保田中亀ノ丁の自宅に塾を開き、のち中谷地町に転居し「立志堂」と称した。明治２年（1869）に閉じるまで、数百人の弟子を世に送り、門下生に大蔵大丞・熊谷武五郎、秋田市長・大久保鐵作、陸軍大将・大嶋久直らがいる。そして、慶応４年（1868）47歳で明徳館学長の一人、助教となる。

３．通明と藩主

通明と藩主佐竹氏との関わりをみると、義厚、義睦、義堯の三代に仕えている。そして、安政４

* 秋田県立博物館

年（1857）の義睦の死去について、通明の書いた記録がある。



「履歴」中の御容體書（個人蔵）

「御容體書」という文字が見える。そこには、義睦公の症状と、どのように治療したかが書かれている。症状には、御足脛御水腫（足やすねのむくみ）・御虚里御騒敷（動悸）・御衝心・御息迫（呼吸困難）などの言葉が見え、軽からざる御容體となっていったとある。そこで用いられた薬は、胃苓湯・沈香・分消湯・呉茱萸湯・茯苓・降気・豁胸湯・大柴胡湯・甘遂・朝鮮人参・真附湯・生脈散などとなっている。これらは漢方薬であり、そのほとんどが現在も使われているものである。義睦公の治療は漢方を中心としたものであった。

ここで注目してほしいのは、この資料が通明の「履歴」であることである。嘉永５年（1852）に明徳館の詰役と教授手傳を仰せつけられたところまでは、その名の通り、彼の履歴が記されている。しかし、安政４年７月１日をもって、突然、藩主の病気から逝去、葬儀等の記事となる。そして、義堯公へと藩主の交代が一段落すると、再び通明の履歴が記されていく。つまり、通明の履歴、すなわち人生に、藩主の存在が大きく割り込んできているのである。この資料の内容とその構成は、通明ら藩士にとって、藩主がいかに重要な存在であったかを物語っているものといえよう。

４．通明の学問と思想

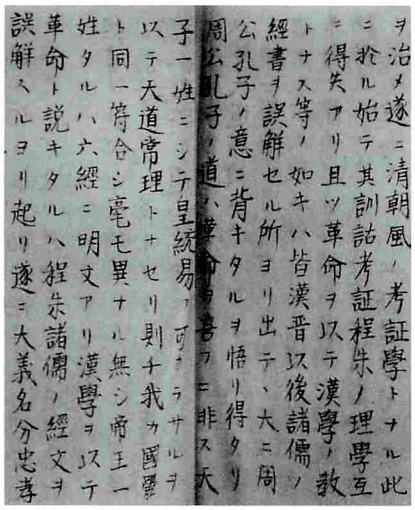
通明の学問の中心は『易経』である。易経とは中国の古典であり、五経の一つで本来は卜筮という占いの一種のテキストである。周（紀元前1100年頃～前256）の時代に発達したので「周易」ともいわれる。12編から成り、八卦の組合せにより、64の「卦」の意味を説く「卦辞」、各卦を構成する６本の「爻」の意味を説く「爻辞」の２編が易経の本文である。また、「彖伝」「象伝」「繫辞伝」など解釈の部分が10編あり、これを「十翼」という。

「卦辞」は周の文王が、「爻辞」は文王の子の周公が、「十翼」は孔子が作ったといわれるが伝承にすぎない。周代から漢初にかけて、少しずつ完成していったと考えられてる。儒家は自己の主張をこの易経の解釈に結びつけ、宇宙論や哲学を付加して、中国人の人生観や世界観に大きな影響を与えることになる。日本でも盛んに学ばれ、「明治」「大正」などの元号も易経の文章からとられたものである。

「易」の字源については、トカゲの類の象形文字であるとされている。トカゲは体色がよく変わることから、易の字には「かわる」という意味がある。易とは、算木や筮竹を使って物事の吉凶を判断するものである。易経の英訳は「Book of Changes」で、世の変化を予言する術として発達した、政治にはなくてはならない君主の学問である。

易経を学ぶうち、通明は「皇統一系」という独自の解釈に至る。易経については北宋の程頤の『伊川易法』や南宋の朱熹の『周易本義』などの解釈が主流であった。しかし、通明はこれらの学説に大きな疑問を持つようになる。通明は42歳の時、「履歴」に「周公孔子の道は革命を喜ぶに非ず。天子一姓にして皇統易ふべからざるを以て大道常理となせり。」と書いている。「易経が説くのは革命ではない。天子は一系で皇統をかえてはならない。」というもので、それまでの易経に対する認識が「革命の書」というものであったことへの反論である。

後、皇室とのつながりが強くなる通明であるが、皇室との接点など全く考えられないこの時期からの持論なのである。この思想を貫徹することが、すなわち通明の人生であった。



「履歴」より「天子一姓」の記述（個人蔵）

5．通明と戊辰戦争

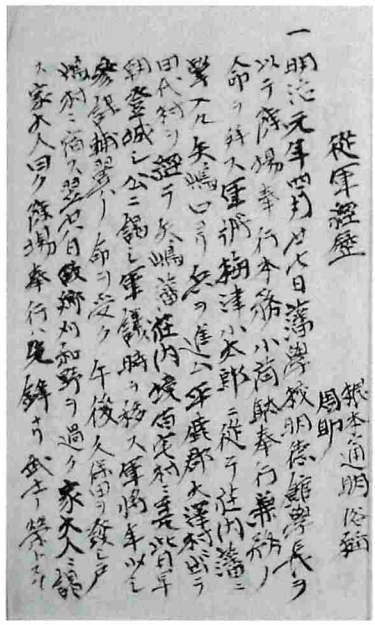
戊辰戦争は慶応４年（1868）１月の鳥羽・伏見の戦いから明治２年（1869）５月の箱館戦争までをいう。幕府側佐幕派と、薩摩藩や長州藩などの朝廷側倒幕派との内戦である。幕府軍と会津・桑名両藩軍が鳥羽・伏見の戦いで敗走すると、倒幕派は朝廷の徳川慶喜追討令を受けて軍を江戸に送る。慶喜は恭順の態度をとったため江戸総攻撃は中止されたが、江戸開城後も多くの旧幕臣が江戸を脱走して、関東各地で新政府に抵抗戦を行う。

朝敵とされた会津・庄内両藩の降伏謝罪条件について、両藩と新政府とを斡旋しようとした仙台・米沢藩などの努力も失敗する。新政府や奥羽鎮撫総督府に不満を抱いた東北諸藩は、５月奥羽列藩同盟さらに奥羽越列藩同盟を結成して倒幕派に対抗する。慶応４年（1868）７月仙台藩領白石に公議府を設け、輪王寺宮を軍事総督に推戴し、奥羽越の諸藩の重臣が参加して軍事・民政その他を議定・執行することになる。これは、奥羽越の地に成立した諸藩連合政権だったが、やがて７月の長岡落城で北越戦争に破れ、９月の会津戦争における会津落城に及んで、降伏することとなる。

奥羽越列藩同盟の成立にあたっては、秋田藩からも横手城代・戸村十太夫が列席し、連判状に調印している。しかし結局、秋田藩だけが同盟から離反し、新政府につくことになる。

戊辰戦争における秋田藩の動向は、きわめて曖昧なものであった。白石会議において戸村が調印する一方で、奥羽鎮撫総督府の要請に応えて庄内藩に出兵してもいるのである。

しかし、通明の考えは一貫していた。易経の解釈からしても、一系の天皇のために身を捧げようとするのである。通明は、陣場奉行本務・小荷駄奉行兼務となり、奥羽鎮撫総督府副総督・沢為量一行を藩境である院内に迎えるなど、秋田藩の命運にかかわる仕事を果たす。そのいきさつは、「従軍経歴」に詳しく書かれている。沢副総督を迎え入れることには、秋田藩内でも異論があった。白石会議への参加や庄内藩への配慮、さらには副総督に同行している薩摩藩・長州藩の兵を領内に入れることに対する抵抗などからである。



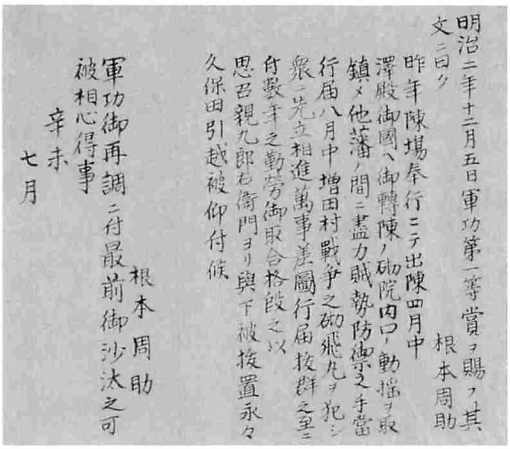
「従軍経歴」（個人蔵）

「従軍経歴」によると、通明の判断は「奥羽列藩約アリト雖モ戸村十太夫ノ専断ニ出テ我君ノ知ル所ニ非ズ　我君義堯ノ如キハ純忠一藩ヲ以テ朝廷ニ奉ス」というものであった。秋田藩主義堯公の真意はわからないが、通明ら藩士の強い勤王の主張と沢副総督の迎え入れが、同盟からの離脱と、新政府につくという秋田藩の方向を定めることとなる。その後、７月３日に至って秋田藩の考えは勤王に決し、翌４日には秋田藩士による仙台藩使者６名の斬殺もあり、奥羽列藩すべてを敵に回すことになる。

奥羽列藩は秋田藩を攻撃し、藩内の大半が戦場となった。あわや久保田も陥落という状況だったが、新政府軍の援軍と兵器によって形成は逆転し

奥羽越列藩同盟は崩壊する。

通明はこの戊辰戦争において、敵弾で傷を負いながら「万事差図行届き、抜群の至に付」「軍功第一等賞」と評価された。


明治二年十二月五日軍功第一等賞ヲ賜フ其文ニ曰ク　根本周助
昨年陳場奉行ニテ出陳四月中
澤殿御國ハ御轉陳ノ砌院内口ノ動揺ヲ取
鎮メ他藩ノ間ニ盡力賊勢防御ノ手當
行届八月中増田村戰爭之砌飛丸ヲ犯シ
衆ニ先立相進萬事差圖行届抜群之至ニ
付數年之勤勞御取合格段之以
思召親九郎右衛門ヨリ與下被按置永々
久保田引越被仰付候
軍功御再調ニ付最前御沙汰之可
被相心得事　根本周助
辛未
七月

「軍功第一等賞」の文（個人蔵）

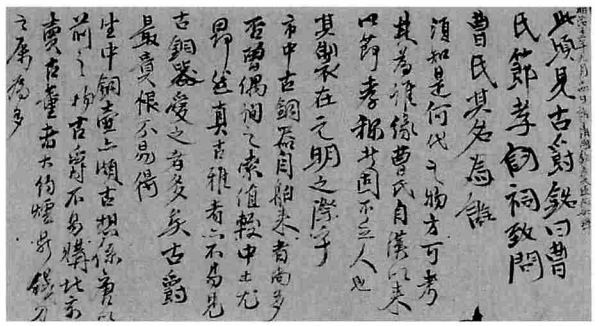
6．漢学者通明

県政の時代となり、藩校・明徳館の廃校に伴い、明治５年（1872）８月には通明も秋田県の役人となる。９月には権大属の辞令を受けている。地元採用者としては上級の役人になったわけである。しかし、明治６年（1873）に辞職、一家を挙げて上京する。安定した職を捨てた動機については、はっきりしていないが、長州藩出身の秋田県権令国司仙吉との衝突によって辞表を出したともいわれている。

東京では、明治７年（1874）大蔵省に出仕を命じられる。職務は沿革誌の編集であった。やがて明治13年（1880）９月、依願し免官となる。漢学界で認められ始めたことが動機ではないかと考えらる。

通明が大蔵省に勤務していた明治10年（1877）、初代中国公使として何如璋が来日する。彼は中国でも有名な文人であった。通明は、翌年５月、自らの力量を確かめるため、公使館に何如璋を訪ねる。言葉の通じない二人は、筆談によって討論をした。何如璋は通明の博学に驚き、「天下の大儒」と讃える。

何如璋との討論に自信をつけた通明は、当時の高名な漢学者を次々に訪問し論戦を挑む。それは学問の世界での道場破りともいえる激しさだったという。結果として、通明は学問では日本国内に敵なしとの自信を深めることとなり、通明の力量も、しだいに学会で評価されるようになる。



通明と何如璋の筆談（個人蔵）

右大臣岩倉具視は維新後の西洋崇拝の風潮を憂え、明治13年（1880）６月、谷干城らと斯文学会を創設する。この時、通明は斯文学会の文学に選ばれている。つまり、彼の博識が認められ講師の地位に就いたのである。通明はこの斯文学会で地位を得ていき、明治16年（1883）、62歳で教授となる。

斯文学会は、有栖川宮熾仁親王を会長にいただいていて、通明は皇族との関わりも深くなっていく。これは「皇統一系」という通明の考え方にもよるだろう。「華族会館学則取調」や「宮内省御用掛」「諸宮様御進講」を務め、「済寧館講義」となり明治天皇への御講義を担当することとなった。そして、明治19年（1886）１月７日、宮中「講書始」の儀で『易経』の中から「泰」の卦を御進講するという栄誉を賜った。これは天子と臣下が充分に交流し調和するさまを示すめでたい卦である。なお当時は、宮中に参上するときは洋服というきまりだったのであるが、明治天皇の特別の許しを得て、洋服嫌いであった通明は羽織袴で通したそうである。

明治23年（1890）、69歳の通明は家塾・根本義塾を開く。この塾は義道舘とも呼ばれた。ここで門弟を養っていた通明は、明治28年（1895）には帝国大学文科大学講師、翌29年（1896）には文科大学教授となる。新任式に臨んで、通明は「東洋の漢学は自分とともに滅ぶ。おまえ達は私の目の黒いうちに謹んで講義を聴け。」とあいさつしたという。

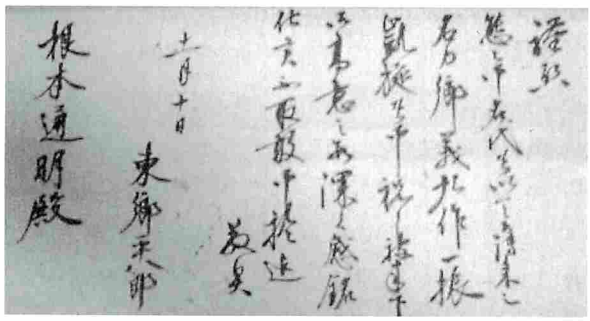
通明は明治32年（1899）、文学博士の学位を授与されている。秋田県人として初めての博士である。なおこの際、論文の提出を求められたのであるが、自分の論文を評価できる者などいないと断っている。であるから、東京帝国大学総長の推薦という特別な扱いで学位が授与された。教授陣の酒の席で隠し芸を求められ、「私は表芸はあるが隠し芸はありません。武道のたしなみはあるので相手をしましょう。」と言って、棍棒を構えて気合いを掛けたというエピソードも残っている。

明治34年（1901）『周易象義辯正』を出版する。その出版と通明八十の傘寿を祝う祭が、東京小石川園で開かれた。明治天皇からは宮内省を通じて金一封が贈られ、閑院宮載仁親王からは三重の銀杯が贈られた。佐竹侯爵や帝国大学総長をはじめ多くの来賓も列席した。

明治39年（1906）、通明は肝臓病となり85歳の生涯を10月３日に閉じる。そして、佐竹家の菩提寺である東京の総泉寺に埋葬された。

７．通明の人物像

通明は常に短剣を懐にしており、外出の際は小刀を携えたという。刀剣の趣味があって、数多くの刀を持っていた。明治35年（1902）、北京大学の前身である京師大学堂の学長にあたる総教習であった呉徐綸が来日する。通明は会見を求め、「皇統一系」の自説をもって論争する。このとき、通明は刀剣一振りを手みやげとしている。東郷平八郎からの手紙も、刀剣を贈られたことへの礼状である。また、角館の武士、富永翁助に与えた短刀も残っている。



東郷平八郎からの礼状（個人蔵）

夏目漱石も尊敬していた、通明の東京帝国大学における同僚、ドイツ人哲学教授ケーベル博士は、通明を「日本的精神と性格との真の代表者」であり「本物の人間」であると評価している。

８．通明と初岡敬治

秋田藩の奥羽列藩同盟からの離反については、吉川忠安ら勤王派の決起が原因の一つである。吉川門下の初岡敬治らの若手藩士が、大挙して重臣宅に押しかけ、勤王を訴えたという。

初岡は、戊辰戦争において連戦連敗だった秋田藩の窮地を救おうと海路で京へ上り奔走し、秋田への援軍を得るという大役を果たした人物である。戊辰戦争後、初岡は、明治元年（1868）設立の「公儀所」の公議人を務めた。公儀所が廃止され「集議院」に改まると、初岡も集議院議員となる。議員は各藩１名であったから、初岡は藩の代表者でもあった。

秋田藩の奥羽列藩同盟からの離脱は、同盟の内部崩壊をもたらし、戊辰戦争を勝利に導いた。秋田藩は多くの戦死者・負傷者を出し、およそ4500戸を焼失する犠牲を払ったが、その功績はついに報われることはなかった。武器・軍需品・総督府側の食料費など、合わせて60万両以上が藩の借金として残り、新政府の高官に登用された者もいない。こうした不満が引き金となって、初岡が引き起こしたのが、「のぼり事件」である。

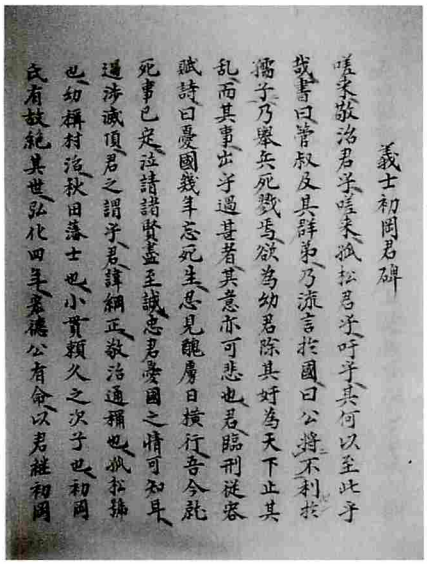
明治２年（1869）７月、東京九段の招魂社で維新に殉じた人々の慰霊祭が行われた。その際、「天涯烈士皆垂涙　地下強魂定嚼臍」と大書した大きなのぼりが、境内中央に立てられた。のぼりには、久保田藩邸中・初岡の署名があった。初岡は秋田の志士の怒りを代弁し、薩摩・長州中心の新政府を批判したのである。

新政府ににらまれた初岡は、維新の軍事面の指導者であった長州の大村益次郎襲撃を疑われるなど失脚する。

そして、国家転覆の陰謀に荷担したという罪で、明治４年（1871）12月３日に「庶民ニ下シ斬罪」の判決を受け処刑された。処刑の決め手となったのは、初岡と親交のあった九州柳川藩の古賀十郎からの手紙だった。古賀は、攘夷派の公卿外山光輔、愛宕通旭を盟主とした明治政府の転覆を謀った二卿事件に関与していた。古賀の手紙は、初岡

にも決起を促し、上京を要請する内容だったといわれている。しかし初岡の返事は、古賀に自重を促すものであったという。つまり、事件には直接関与していないのである。新政府にとってこの一件は、やっかいな存在であった初岡を排除する口実に過ぎなかったのではなかろうか。

この事件に関連して、通明がしたためた「義士初岡君碑」およびその下書きが残っている。初岡の言動への共感や同情からであろう。当時、こうした文章を書くことは、通明にとっても危険なことであったろうが、義憤ゆえの行動であったと考える。文中には初岡の辞世の漢詩を引用している。


義士初岡君碑

嗟乎敬治君乎嗟乎戚松君乎吁乎其何以至此乎
哉書曰管叔及其群弟乃流言於國曰公將不利於
孺子乃舉兵死數焉欲為幼君除其奸為天下止其
乱而其事出乎過甚者其意亦可悲也君臨刑從容
賦詩曰憂國幾年忘死生忍見醜虜日横行吾今就
死事已定泣請諸賢盡至誠忠君憂國之情可知耳
通涉識頃君之謂乎君諱綱正敬治通稱也戚松号
也幼稱村治秋田藩士也小貫頼久之次子也初岡
氏有故絶其世弘化四年襲德公有命以君継初岡

「義士初岡君碑」（個人蔵）

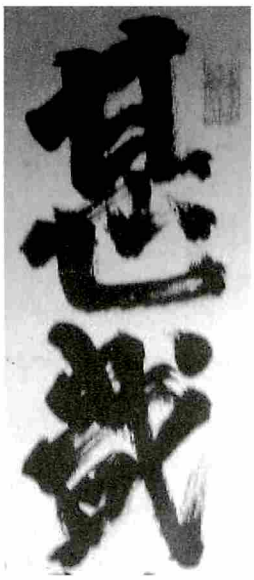
「憂國幾年、死生を忘る。忍び見るに醜虜日に横行す。吾今死に就く事已に定まれり。泣いて請う、諸賢至誠を盡くせ。」

江戸時代、政治的な理由で死を選ばざるを得なかった人々は辞世に漢詩を用いたという。その内容も相俟って考えるに、初岡や通明は武士の精神を具現する人物の一人だったのではなかろうか。

9．通明と顔真卿

通明の書は顔真卿流である。顔真卿は強烈な書風で知られる書家であるが、唐代を代表する忠臣でもある。顔真卿は、安禄山の反乱にあたり、一人義兵を挙げる。しかしうまく立ち回れないため、宦官や宰相らに妬まれ、淮西節度使李希烈の反乱に際して、説得のための特使という危険な役目を押しつけられ、逆に捕えられる。李希烈は顔真卿の才覚を惜しみ、自らの部下となるよう何度となく説得したが、真卿は断固として拒否し殺された。殺されるとわかっていながら命令に従い、なお忠節を通した武人だったのである。

通明がこのことを知らないわけはない。顔真卿の書を選んだのは、彼の生き方に感銘を受けたからであろう。それは通明の厳格な気質をも表している。



書「甚哉孝之大也」（部分・個人蔵）

10．おわりに

人は、相手や状況によって自分の言動を変えてしまいがちである。自分の信念を貫き、時として死をもいとわないという生き方ができる人はごくまれだろう。通明は易経についての独自の解釈である、「皇統一系」に自らの人生をかけた人であった。藩主に忠節を尽くし、戊辰戦争がいかに不利な状況にあろうとも、勤王の志を守った。どんなに高名な学者にも、自説を曲げず論戦を挑んだ。また、身の危険も顧みず初岡に碑文を贈った。そして圧倒的な学問の力で、前人未踏の世界を切り拓いていったのである。

「武士学者」という言葉は、単に武士であり学者であったという意味ではない。生涯にわたって、武士の精神を持ち続けた学者という意味である。刀剣を愛し結髪を通した根本通明は、その風貌と同様、精神的にも終生武士であり続けた。その生き方を語り伝えていきたい先覚者の一人である。